

見立ての変遷 大城夏紀の視覚的連歌

野村しのぶ | 東京オペラシティ アートギャラリー シニア・キュレーター

平面や立体に加えて、壁面自体も作品の一部とする大城夏紀の展示空間に足を踏み入れると、ある風景の中を歩いているかのような感覚を覚える。実際、大城の制作過程には風景、そしてそれを見た特定の人物の心情が密接に結びついている。といっても、自然界にあまり見られないパステルカラーで統一された抽象的な作品群から即座にそれを見て取るのは容易ではないだろう。大城の作品とは、幾重にも重ねられた見立てと展開の結晶で、その出発点となるのは伝統的な和歌をはじめとする詩歌、すなわち言葉によって紡がれた情景である。大城の仕事は、その情景を視覚化し、それを展開させていく試みであると言う。

実際の制作にあたって、大城は詩歌をよみながら、そこに動きや空間を感じとる。言葉の順番、場面の切り替え（和歌の場合上の句と下の句で行われることが多い）、描写された風景や心情など、詩歌から感じ取った動きと空間を抽象化し、まずは想像上の立体図を思い描く。言葉による情景やリズムに加え、詠まれた詩歌の文脈や詠み手の背景も意識しながら、それらすべてを抽象化し、パターン化した模様をつくっていく。また、詩歌に関連する象徴的なモチーフをドローイングで具象的に描いて反復させ、プリンターやレーザー彫刻によって包装紙のような模様を作る。こういった要素のなかから組み合わせたものが一番目の作品で、抽象的ではあるが詩歌の大城なりの再現であり、見立てである。

大城の制作はさらに進み、次はこの作品を展開させていく。一番目の作品の一部分を抽出して色や形を変化させたり、位置を入れ替えたりするが、ここからの制作は視覚面への注目に重きを置き、見立てをずらしていく。時には詩歌に戻って新しい構造を探ることもあり、前の作品に応じて次の作品へと、そして詩歌の世界と往復することによって作品は複雑に展開していく。最終的に5、6点にのぼることもある作品群は、さながら作家一人による視覚的な連歌とも言えるだろう。

ここで具体的に作品を覗いてみよう。「月傾きぬ」のシリーズでは、柿本人麻呂の次の和歌が題材とされている。

東の野に炎の立つ見えて かへり見すれば月傾きぬ

(東の野に、太陽が昇る前の光が見えてきた。振り返ると西の空にはまだ月があり、傾きかけていた)

画面には曙の鮮やかな光、弧を描く月のシルエットと思しき色面が、振り返る身体の動きを表すかのようにリズムカルに描かれている。しかしここで前述した詩歌の文脈と詠み手の背景にも視点を向けてみる。柿本人麻呂によるこの和歌は実際の風景の描写でありながら、そこに時事的な事柄を重ねていることはよく知られている。宮廷歌人であった柿本が軽皇子（後の文武天皇）に随行した際に詠んだとされるこの歌は、早世した軽皇子の父・草壁皇子を沈みゆく月に、若年の軽皇子を昇る朝陽に見立て、輝かしい治世を称え、願った歌でもある。権力者の偉大さを太陽と月という宇宙的なスケールで、時の流れを天体の巡りで喩えているが、ここで再び画面に描かれた模様注目したい。レーザー彫刻で描き出されている橘とほととぎす、萩と鹿、万葉集にも登場する日本の伝統的なこの取り合わせは、前者が夏、後者が秋の象徴である。異なる季節を同じ画面に収めることで、本来昼と夜を示す朝陽と月を同時に眺めた情景、さらに治世の移り変わりという時の流れの見立てと考えられないだろうか。

最後に、大城がなぜ文学、それも古典的な詩歌を題材に選ぶのかについて記す必要があるだろう。この疑問に対する大城の答えは明解である。千年以上前の万葉の時代の人々が、何を見て心を動かしていたのか。当時の画像が存在しないその情景を、言葉だけで「見る」ことは、現代の私たちの想像力を広げてくれるから、と言う。月を詠んだ和歌を味わった後に見る今晚の月は、昨夜見た月とは違って見えるはず。自然であれ都市であれ、風景を眺めることすら忘れていた現代生活に彩りを取り戻すその過程を、大城は作品制作を通して実感しつつ表現し、さらにはそれを観る人に伝えようとしている。見立てとは、視点をずらして物事を再び観察し、解釈することである。文学を通して知る他者の視点は、それが日本古来のものであれ、異国のものであれ、私たちの日常に新たな視点を与える。大城の作品が示すのは、視点の変換の連続と、それによってもたらされるであろう私たちの日常の幸福かもしれない。